

「事例レポート」身近な動物たちと関わって活動する団体を訪ねて



スギの樹の上で休憩中のムササビ。



「本物を見れば誰でも気づきます」

ムササビから見える

身近な自然と動物の大切さ

取材場所である中央大学付属
高等学校を訪ねた。エレベーター
を出ると、ムササビの愛らしいイ
ラストが目飛び込んできた。廊
下一面に、生物部による野生動物
の研究発表のポスターが掲示され
ている。とても高校の部活動のレ
ベルとは思えないクオリティに驚
かされながら、この学校の生物部
顧問であり、ムササビ研究の第一
人者といわれている岡崎弘幸先生
にお話をうかがった。

夜景の中を滑空する
ムササビに魅せられて

岡崎先生は大学生の頃、動物関
係の雑誌にムササビが紹介されて
いる記事を見て、仲間と一緒に、
夜の高尾山にムササビを見つけに
行ったことが活動のきっかけだっ

たという。高尾山から都心を望む
きれいな夜景の中を滑空する不思
議なムササビの魅力にひかれ、月
に1回高尾山に観察に通うようにな
った岡崎先生は、当時高尾山に
あったユースホステルから、毎月
市民向けに観察会をやってくれな
いかとの依頼を受ける。そして年
に6回、1泊2日のムササビ観察
会を始めるようになった。観察会
は大人気で、TVの取材が入るこ
ともあったという。

大学を卒業し、高校の教員にな
った後も、岡崎先生は毎月高尾
山に通い続けた。そして観察・調
査を継続し、ムササビを中心にシ
カやカモシカなど大型の哺乳類も
含め、主に東京の分布状況を調べ
るようになっていった。

「山林の開発が進むにつれて森



小さなときのグルル。



東京都の許可を得て飼育している「グルル」。
野生のムササビと同じでグルルも日中は眠そうにしている。

が寸断され減少することで、昔からいたムササビのような動物たちは、他に逃げる事もできず、取り残され、絶滅してしまうのではないかと危惧し、分布調査を始めました。分布状況を調べると、ムササビやテン、リスなど、森で暮らす動物たちにとって、森が帯状につながっていることがとても重要だとわかります。最近の圏央道など高速道路の建設にもこうした森林保護の考え方が取り入れられています。道路が森の上を通ることで、高架の下の森を動物が自由に移動できるのです」と岡崎先生はいう。

観察や調査は 生徒との二人三脚で

こうしたムササビなどの観察や調査は必ず学校の生物部の部員である生徒たちと一緒にやっている。例えば八王子市全域で、山沿いにある学校の子どもたちを対象に「こんな動物見たことある？」といった大規模なアンケートを実施。その結果をもとに生徒たちが地域住民に聞き取り調査を行った。調査を通じて生徒と地域住民との交流も生まれたという。

また、生物部では、巣穴から何

らかの理由で道に落下し、ケガをして緊急に保護されたムササビの子どもを、東京都の許可を得て飼育している。

「グルル」と名づけられたその子ムササビは、いわば生物部のマスコットの存在でもあるが、生徒たちは交代で世話をしながら、日々その生態を観察し、研究している。人間に飼育される環境でも、グルルは日没後すぐと、日の出数時間前の2回にわたって活動が活発になるピークがあるなど、野生のムササビと変わらない行動が見られるようだ。

こうした飼育を行いながら、夜間の観察に必要なセンサーを考案したり、生物の進化や生態系の学会等で研究成果を発表するなど、先生と生徒たちの二人三脚で活動が行われている。

岡崎先生は「人間が動物たちの生活圏域に入らせてもらいたい、その生態を見せてもらうことが観察だと思っています。こうした気持ちでいると、自ずと人間の力で動物たちの住処である森を破壊するのは良くないとわかるものです」

また望ましい森のあり方について、「ムササビたちの住む森、暮らせる森は、モミジ、カシ、シイな